

対談：キング牧師とスピーチ

— ことばの力 —

森住 衛 (桜美林大学)

鈴木 健 (明治大学)

1. はじめに

森住 NEW CROWN (以下、NC) は、1978 (昭和 53) 年の初版以来、3大理念というものを掲げております。すなわち、「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」です。この3つは、その後の版によって、時代によって、言い方の順序や強調の仕方は違いますが、NC がいわば堅持してきた理念です。今日は、同じく NC が伝統的に扱ってきた、キング牧師についての課「I Have a Dream」を素材にして、特に、「人権」、「共生」という題材と「スピーチ」という形式の2つの観点から、鈴木先生のご専門の話を伺いながら、この3大理念を深めていければと思っています。

鈴木 よろしくお願ひします。今、森住先生が言われた3大理念は、とても重要だと思います。私は、コミュニケーション学、特に、「公の場における説得の技法」としてのレトリックを研究してきたのですが、実は、レトリック研究においても、「ことばの教育」、「異文化理解教育」、「人間教育」という概念は、同様に重要です。

まず、「ことばの教育」についてですが、これまで、レトリックについては、あまり一般の人に関心を持たれることがなくて、メディアの人にレトリックの話をしてほしいと頼まれることも皆無でした。しかしながら、オバマ大統領が選挙戦に関わるあたりから、ディベートやオバマ大統領の就任演説を分析してほしいという要望などを含めて、世間での関心も高まってきました。これまで、日本の教育でことばの勉強と言うと、ことばの運用能力ばかりが強調されていて、例えば、会話がうまいなどの、わりと表面的なことばの使い方に終始してきました。しかし

ながら、オバマ大統領の登場で、アメリカでもレトリックの重要性が見直されてきており、それ以上に日本の人たちが、スピーチの魅力やレトリック、ことばが持つ力に興味を持つようになったというのは面白いことだと思います。

次に、「人間教育」に関してです。キング牧師であったり、オバマ大統領であったり、歴史に残る有名なスピーチをした人は、社会とのインタラクションの中で様々な経験をしています。そして、その中から、自分が話すべきこと (what to say) を考えだし、その場その場において、どのように言えば (how to say) 説得力があるかを考えています。また、ことばが発せられることによって、話者と聞き手の間で相互作用が起こり、社会を動かしてきました。そういう意味で、「人間教育」というキーワードは面白いと思います。

最後に、「異文化理解教育」についてです。私たちコミュニケーション学者の研究分野には、大きく分けて3つあります。まず「どのように人の知が形成されるか」、それから「どのように意思決定がされるか」、最後に「どのような意思対立が起こっているか」というものです。仲がよいだけがコミュニケーションと勘違いされることが多いのですが、けんかをしたり、「公民権運動」にも見られるように、立場や意見が違う人同士が、ことばを使ってどのように第3者を説得するかという意味対立も、実は、重要なコミュニケーションです。これらのことから、今回の対談は非常に面白い企画だと思っています。

森住 コミュニケーションやレトリックに、人間としての苦悩など、人間的な成長がなければだめだというお話ですね。

鈴木 はい。それから、人間は体験というものが

重要です。体験が違えば、同じことを言うのでも、言い方も変わってくるし、言われた方の反応も変わってくるということですね。

森住 体験がなければ、ことばも心に響かないですよ。ましてや、「異文化理解教育」においても、先生がおっしゃるように、単なる啓蒙で終わるようなものではありません。今のお話で、この「異文化理解教育」に加えて、「ことばの教育」、「人間教育」を標榜してきたことは間違いではなかったと、自信を持たせていただいた感じがします。

2. アメリカの公民権運動

森住 さて、キング牧師の公民権運動を題材とした“I Have a Dream”が、初めてNCに登場したのが、1981（昭和56）年度版です。この課は、アメリカ合衆国における、African Americanの人たちの生きる権利を訴えた、わかりやすい人権問題の題材になっていますので、それ以来、NCのいわば十八番のような存在となっています。そこで、この課のような人種差別反対運動を起こした、アメリカ合衆国の公民権運動全般について、どのように考えているかお聞かせください。

鈴木 公民権運動と関連した出来事では、リンカーン大統領が奴隷解放宣言をしたことは、非常に大きなepoch-makingでした。しかしながら、実際には、目に見えない形での差別が行われるなど、あまりその後の状況は変わりませんでした。NCの“I Have a Dream”にも書かれているように、例えば、バスに乗っても黒人は後ろで白人は前に座る、同じレストランに入れない、“For White Only”という看板がいたるところに出ているなどの状況が続いていたんですね。

森住 そのような状況のもとに、キング牧師の“I Have a Dream”が生まれたのですが、この演説の中では先ほど出ましたレトリックの点からいうと、どんな工夫がみられるのでしょうか。

鈴木 キング牧師の“I Have a Dream”のスピーチの中で、有名なものの1つにCheck Metaphor（小切手メタファー）というものがあります。日本ではあまり馴染みがないのですが、アメリカ人と“I Have a Dream”の話をする時、よくCheck

Metaphorの話が出てきます。キング牧師は、奴隷解放宣言がお題のままではだめだと言うために、まず、スピーチの冒頭で、「a great white American（一人の偉大な白人のアメリカ人）が、奴隷解放を行ってくれた」と言います。a great white Americanとは、リンカーン大統領のことを暗示的に言っています。そして、「白人は、黒人に対して換金不可能な『小切手』を渡したんだ。しかしながら、Bank of Justice（公正さという名の銀行）が倒産していると信じるわけにはいかない。Bank of Justiceが『小切手』をきちんと換金しなくては、黒人の地位の向上、公平さの達成というものにはなされないんだ」という話をするんです。1つの比喩を使うことの重要性は、いろいろな含蓄が生まれてくるということです。

また、リンカーン大統領とキング牧師とオバマ大統領の3人には、面白い共通点があります。それまでは無名だった人が、あることをきっかけとして、一躍全国的に知られるようになったということです。

リンカーンの場合は、イリノイ州上院議員選挙の前にダグラスと行った奴隷制をめぐるディベートです。リンカーンは奴隷廃止の立場、ダグラスは、奴隷州については、奴隷制を存続する権利を認めるという立場で、複数のディベートを行いました。そのとき、リンカーンは、上院議員選挙には負けるのですが、奴隷制ディベートがきっかけとなって、一躍、全米中に知られる名士となり、その知名度を利用して、後に大統領に当選したんです。ですから、そのディベートをダグラスと戦っていなければ、リンカーン大統領の登場もなかったし、その後の奴隷解放もなかったのではないかなと思うんです。

同じようなことがキング牧師にもあります。NCの教科書に載っている1955年12月のモンゴメリー州におけるバスボイコット運動です。当時、もし黒人がお金を持っていないばかりだったり、人数が少なかったりすれば、ボイコットをしてもインパクトはなかったと思います。しかしながら、当時の黒人の経済力や人数は、行政やビジネスの世界で無視できない存在感を持っていました。その結果、三百数十日にわたるバスボイコットを無視でき

ず、差別撤廃につながっていったわけですね。当時、26歳の若さにもかかわらず、ボイコット運動のリーダーシップをとったキング牧師が、一躍、注目されるようになって、その後の公民権運動のリーダーになったという点では、歴史の力というものを感じざるをえません。

オバマに関しては、たまたまとても優秀な黒人がいて、コロンビア大学からハーバード大学の法科大学院を出て、大統領になったと考える人もいます。しかし、私は、そこにも歴史の力が働いているように感じます。9.11のあと、人種の融合、あるいは、アメリカ中心ではなく、国際強調体制による世界平和を構築しようとしているときに、歴史の方がオバマという人を必要としたような気がするんです。実は、オバマも、2004年の全国民主党大会で基調演説をするまでは、無名の存在でした。連邦議会の上院議員でさえなく、単にイリノイ州議会の上院議員にすぎなかった。しかしながら、基調演説のときに、自伝のタイトルともなった *audacity of hope* (大胆な希望) ということばを使ったり、*hope* というキーワードを何回も繰り返して、感動的なスピーチを行い、連邦議会の上院議員に当選したのです。当時、オバマは、2012年の大統領選挙に出る予定だったのですが、2004年に注目されてしまったので、4年間前倒しで2008年の大統領選挙にうってでたという経緯があるんです。

リンカーンに関しても、キング牧師に関しても、オバマに関しても、大きなきっかけ、歴史の後押しのようなものがあるという視点から、公民権運動を見ると非常に面白いと思います。

森住 歴史上の偉大な人物とか大きな事件というのは、偶然の産物ではないということですね。



鈴木 健

3. 教材としての異文化

森住 では、次に、中学校英語教科書で教材化するという観点から、お話を伺えればと思います。半世紀前では、ローザ・パークスのバス事件などが、そして、最近では、オバマ大統領の誕生などは、生徒の興味をひきやすい題材ですね。そこで、どのようなものが教材化できそうか、また、教材化する際の観点などについてお聞かせいただけますか。

鈴木 3年前に、1年間フルブライト研究員として南カリフォルニア大学に滞在する機会がありました。その折りに、メンフィスの国立公民権運動博物館に行く機会があり、教材にしたら面白いと思ったものがそこにありました。博物館のパンフレットなんですけれども、歴史の流れが写真入りでわかりやすく説明されているんです。一方、やわらかい内容のものとしては、“Great African American of the 21st Century” という子ども向けのパンフレットも売られていました。このパンフレットには、Whoopi Goldberg など、みんながテレビで見るとような人が載っています。彼ら、彼女らが、実はすごく立派な人で、感動的なことを言っていたりして、それらが紹介されています。日本の場合、かたくいこうとすると、かたくいすぎたり、やわらかくいこうとすると、やわらかくいすぎたりしてしまって、バランスがとれないことがあると思うんで、そういう点は日本も見習いたいと思います。また、大人は、展示物を見て、歴史的な理解ができるのですが、子どもに昔の奴隷船の時代の苦勞の話をして、あまりぴんとこなかったり、かえって劣等感をうえつけてしまうこともあります。しかしながら、いろいろな差別や苦難の歴史はあっても、今、こんなに活躍している人がいるんだというポジティブな動機づけになる点でも、よい教材だと思います。

森住 昔の奴隷の話聞いてもぴんとこないということですが、異文化理解は自分の側に、それも今の時代に、引き寄せて考えないといけないですね。実は、キング牧師の話についても言えることですが、これまで、NCが大事にしてきた題材の取り上げ方として、問題を決して他人事にははいけない、「内なる異文化」の視点でとらえるという発想があり

ます。「外部」の問題を「自分」の問題にすることが異文化理解の本質です。黒人と白人がトイレに行くときに区別されていたとか、水飲み場が colored people と white people で分けられていた話を、遠いアメリカ合衆国の話、古い昔の話にしてはいけないということです。日本にも類似した問題があるのです。NC は内なる人権問題もあるはずだという立場で臨んできました。アイヌの問題を取り上げているのは、この理由です。キング牧師の話ほど極端ではないにしても、これと似たことを、アイヌの人たちに、シサム（「本土」の人たち）がやってきたし、現在も、形を変えて（見えにくい状態で）起こり得ています。つまり、日本の、今の時代にも、人種差別の問題はあるのです。

それから、この種の「人権」や「共生」の問題は、アメリカ合衆国や日本以外にもあります。そのため、例えば、少数先住民族の問題として、ニュージーランドのマオリの問題を取り上げたこともあります。1993（平成5）年度版です。この課の最後では、マオリの人たちのことが英訳で紹介されています。“When my language dies, I die. When my language lives, I live.”という文章ですが、少数言語維持ということばの問題とも関連づけて取り上げているのです。

また、伝統的に、身体が不自由な人たちの問題も扱ってきました。例えば、“Assistance Dogs”（補助犬の話）や“Pete Gray”（片腕の大リーガーの話）などです。そして、人権や共生の問題のマイナスの極限として、「戦争」がありますが、NC は広島・長崎の原爆の話題を伝統的に取り上げています。

このような題材については、英語の教科書なので、そういうものを取り上げなくてもよいという声もあるのですが、私はそうは思いません。日本語でも英語でも、ことばは、私たちの価値観や人生そのものを背負っていますし、人権や共生の問題はこれを端的に表す大切な問題だからです。英語教育がことばの教育である以上、必然的にこの種の問題も取り上げるべきです。現行版でいうと、2年生の「地雷」（Lesson 8 “Landmines and Children”）や3年生の「難民」（Let’s Read 2 “Human Rights for All”）もこの種の問題です。ただ、扱いの上で気を

つけないといけないのは、表面的な扱いにしてはいけないということです。冒頭の話にも出てきましたように、私たち自身の生き方や思いとして、心のこもった文章を提供できればと願っています。

4. 「多人種」「多宗教」「格差社会」の国、アメリカ

森住 では、次にスピーチの話に移りたいと思います。スピーチは、NC では伝統的に取り上げてきた形式ですが、スピーチ教材に関してはどのようにお考えでしょうか。

鈴木 まず、スピーチと切っても切り離すことができない話として、アメリカにおける、「多人種」「多宗教」「格差社会」という側面をお話しようと思います。

カンザス大学修士課程2年のときに Teaching Assistantship をもらえて、Speech Communication の授業を担当していました。新学期に「みんな、こんにちは」と言っ、顔をあげて、びっくりしたんです。そこには、ヨーロッパ系もいれば、アフリカ系もいれば、アジア系もいれば、数ヶ月前に移民で父親についてアメリカに来たばかりで、私なんかよりもぜんぜん英語ができない人もいれば、アラブの高級官僚の息子など、人種がばらばらです。アメリカは、人種のるつば、あるいは mosaic society とされる国であり、人種が違くと、当然、宗教も違う。同時に、立場も価値観も変わってきます。それから、普段、私たちは、アメリカに関しては階級をあまり意識しないのですが、階級の格差もあります。アメリカで授業をやっていると、否応なしに、文化とか、人種の違い、階級の格差みたいなものを考えざるを得なくなるんです。アメリカ研究では、アメリカ文化を知るための4つのキーワードとして、“gender” “race” “ethnicity” “class” があるくらいです。

関連して思うのは、アメリカにいたときに、日本人は “I say something, because I have to say something.”、何か言わなければならない状況だからしかたなく話し、一方、韓国の人は、“I say something, because I have something to say.”、語るべき何かがあるので話すと言われました。日本人は状況を考えすぎたりして、嫌々、意

見を言ったりしているのですが、韓国の人は、他人と反対意見でも、自分が信じていけば言うし、逆に、賛成意見でも理由をつけて言うらしいんです。先ほどの森住先生の「問題を他人事としてとらえてはいけない」という話を聞いて、アメリカ人の尊敬する教授から、「健、この国ではね、他人事を他人事としてとってはいけないんだ。あなたが、人種差別に反対だったら、立ち上がって、声高に言わないといけない。この国では、黙認していれば、あなたはサポートしていることになるんだよ」と言われたことを思い出しました。意見が言えるためには、自分のことはもちろん、他人のことで、このときに差別された黒人の人たちはどう考えたろう、自分がその立場だったら、どのように話すかというように、ロールプレイング的に他人の立場に立って答える問いかけが必要だと思います。

日本もだんだんと、ethnic なバックグラウンドを持った人たちがいることが、都市でも地方でも珍しくなくなっていますよね。そうした多文化社会化は、よいことだと思うんです。けれども、同時に、日本人同士でも格差社会が進んでいるという悪い側面もあります。これからは、自分の立場を主張をしていくということと、他人の痛みがわかり、他人のために社会としてどうあるべきかについて発言する訓練、考える訓練をしていかないと、日本はどんどん悪い方向にいつてしまうような気がします。

5. 日米のコミュニケーション教育

鈴木 その関連で、アメリカにおける、段階的なコミュニケーション教育についての話をさせていただきます。アメリカでは、保育園くらいから、Show & Tell をさせます。この訓練が、小学校高学年くらいまであって、それと重なる形で、Public Speaking につながっていきます。Public Speaking には、3つの目的があります。まず、to inform で、自己紹介、セールスマンによる語り、あるいは、大学の教員の講義などがあげられます。それから、芸人さんみたいに面白い話をして楽しませる to entertain。最後の段階が、to persuade です。説得して、投票してもらう、募金してもらう、献血してもらうなどがこれにあたります。その

Public Speaking の教育が、中学校くらいまで続き、途中から Discussion に重なって、最後に今回は Debate をするという、段階的なカリキュラムが組まれています。

私が常づね思うのは、今、日本の教育は、縦割りで、他教科の先生と、あまり対話する機会もないし、なわばりみたいになってしまっているんです。例えば、アメリカでは、Discussion の手法は、社会科の時間でも学ぶことができます。Discussion を教えるのか、Discussion を使って内容を教えるのかという問題ですが、例えば、市長選挙があると、その日の朝刊を先生が持ってきて、生徒に社説を読ませたりします。A 新聞は、こちらの候補者を応援していますね、B 新聞はこちらの候補者を応援していますねというような解説をして、それから、みんなで Discussion をして、授業の最後には、模擬投票までやってしまうんです。じゃあ、明日の投票結果と比べてみようというようにやるんですけど。アメリカ合衆国では、自分たちが社会に対して、関わったり、関心を持っていくために、それは当然のことなんです。

森住 7～8年前に聞いた話なんですけれど、実は、日本の社会科でも、ディベートの練習を始めているようです。しかし、日本の場合には、ディベートをやると仲が悪くなると聞きます。それから、いじめが起こる。「さっきお前はあんなこと言ったじゃないか」などとなるらしいのです。つまり、意見を対立させることが、人間の好悪や正邪の判断ではないんだということがわからないのです。その土壤がまだできていないんですね。ですから、ディベートをやると仲が悪くなる、という現象が起こってしまうのです。この問題は根が深いですよ。

鈴木 実は、アメリカの高校や大学でも Debate をやらない学校は多いです。Show & Tell は保育園、小学校とやるんですけれども、そのあと、Public Speaking, Discussion までで終わってしまうところも、多いんです。

以前、日本の中学校の国語の教科書に、ディベートの場合は、机をななめに並べて、2、3人ずつ座って、審査員は前にいて、というようなことが書かれているのを見たことがありますが、そのような方法

論よりも、大事なものは、コミュニケーション教育の重要性なり、ステップ別という発想だと思うんです。いきなりディベートをさせるのではなく、まず、自己主張なり、考えさせる訓練をやって、最終的に、ロールプレイング的なディベート、つまり賛成論と反対論の提唱者としての訓練にいけばよいのです。

私はまず、コミュニケーション教育のためにも、過去の日本的な叙情やなさが感じられたり、感情を読み込む、行間を読むなどの訓練をしっかりするべきだと思っています。以前、私が英文科で教えていたときに、学生に抜群の人気を誇っていた助手さんがいまして、学生に聞いてみたんです。「この先生の文学の授業は何で楽しいの?」と。すると、まさに、訳読をさせるのではなく、「彼女がそのとき沈黙した…」という部分で、この「…」の部分では、心の中で彼女は何を考えていたか考えてごらんと、感情を読みとる訓練をさせていたらしいんです。そういう授業は、文学の授業に限らず、コミュニケーションの授業でも、英語の授業でも必要だと思います。やはり、人の気持ちをわかるようにする訓練と、自分の立場から主張する訓練の両方を、バランスよく教える必要があると思います。

私は、他人の気持ちがわからなければ、自分の気持ちはあっても、状況判断、社会判断や歴史判断などについて自分なりの判断はできないと思うんです。それと、自己責任というのは、今、非常に悪い意味で使われることが多いんですけど、権利の裏返しとしての責任ということを理解できる人たちが社会をつくっていく必要があると思います。そのためステップ別のコミュニケーション教育を、日本でもできないはずはないし、教科書の仕事に関われば、科目を超えて、また、大学、高校、中学校、小学校、そして、幼稚園までの先生が集まって、理想の教育、教科書をつくっていかないといけないと思っています。

6. 日米のコミュニケーションスタイル

森住 私は、最近では、「幼・小・中・高・大・院・社会」という言い方をしているのですが、確かにこのような<縦>の連携が必要です。ついでに言うと、国語や社会、道徳などと英語というように<横>

の連携も必要ですね。

ところで、話をもとに戻しますが、一般に、欧米のスピーチには、結論を先に言うというスタイルがあります。ディベートを日本でやるのは、まだ無理なように、私は、西洋のスピーチスタイルそのものを日本に持ってくることに関しては、多少の危惧を抱いています。全部が全部、西洋に染まる必要はないと。日本のレトリックで、漢詩の形式からもらった、起承転結というものがありますが、それは、西洋の人にとってはまだるっこいようです。最初に結論を言ってほしいと。しかしながら、英語教育で、特に、高校におけるライティングの指導やスピーチの原稿の指導の際に、結論や「話題文」を先に出すという指導をどこまでしてよいのか悩むところです。日本人には日本人のスピーチの仕方があり、回りくどいけれど、最後には結論にいきつくという形式があってもよいのではないかと思います。

鈴木 実は、よく知られる、欧米のレトリックとかアメリカのコミュニケーションスタイルとは、正確には、アメリカのレトリックではないんです。私たちが「アメリカ人のレトリック」と言うとき、それはアメリカ人の中の白人中流男性のレトリック、コミュニケーションスタイルのことをしばしば指しています。ですから、アメリカ人女性やアジア系の方は時に日本人と同じように、回りくどい言い方をするし、アメリカの黒人の方に、日本的なコミュニケーションスタイルで説明すると、まさに私たちと同じだ、わかりやすいと言われたりします。

森住 もう1つ、つけ加えて言うと、ヨーロッパ系アメリカ人じゃないですか?

鈴木 ヨーロッパ系ですね。アングロサクソンの方などです。Introduction (序論), Body (本論), Conclusion (結論)と続く白人のLinear Logicに



森住 衛

対して、コミュニケーション学者は *Convuluted Logic* と呼ぶのですが、ぐるぐる回ってだんだん中心にいくロジックは、実は、*African American* の人なんかにもすごくわかりやすい。

森住 アジア人もそうですね。

鈴木 アジア人もそうです。

森住 道具として英語を使う場合、英語は、「日本人らしさ」など、いかなる精神も入れ込む「器」でなければいけないと思っているんです。スピーチレトリックもこの議論に当てはまります。英語のレトリックだけではなくて、日本語らしいレトリックも英語を使って言ったってかまわないわけですね。いつも結論を先に言わないといけない、ということになってしまっはいけないと思うんです。

鈴木 アメリカ人のコミュニケーションについては、他にも面白い話があります。先ほど言ったように、アメリカでは、多文化、多人種、多宗教、階級の差が大きいので、必要性からどうしても自己主張だけうまくなってしまふんです。日本のビジネスコミュニケーショントレーニングでは、ほとんどがもっと話せるようにする、得意にすることに時間がさかれるんですが、アメリカのビジネスコミュニケーショントレーニングでは、「もっと話を聞け、話すのはよいから」と、人の話を聞くことに専念させる。だから、ビジネスピープルのディベート研修などで官公庁や企業に呼ばれて行ったときには、「みなさんは、半分はすでに *good debater* だ」と言うんです。「*Japanese people* は *good listener* だから、誇りを持ってください、自信を持ってください」と。一方、アメリカ人は、自己主張だけは得意だけれど、相手の話を聞いていないので、*bad debater* だという話をすると、どっと笑いが出て、緊張がとけるんです。

森住 まさにそうだと思いますね。

鈴木 もう1つ面白いのは、アメリカ人でも話が苦手な人もいます。自著の“*Lingua Frankly*”にも書いたのですが、アメリカのコミュニケーション学部の名門校は、中西部に集中しているんです。*Ivy League* を中心とする東部の学生さんたちは洗練されているので、*Public Speaking* なんてお手のものなんですよ。西海岸の人たちは、非常に社交

的なのでそのような学部は必要ない。ところが、農村部が多い中西部の人たちは、^{ぼくどつ}木訥で話下手なので、自分の子どもたちが大学を卒業して、社会に出て、*survive* できるのかということを親たちが心配して、コミュニケーション学部をたくさん設立させたという経緯があるんです。だから、いまだにコミュニケーション学部の名門校というと、アイオワとか、カンザスとか、ミネソタとか、中西部のいわゆる田舎っばい大学なんです。私が *Teaching Assistant* をしたカンザス大学でも、*Speech Communication* は、理系の学部の必修科目でした。理系のエンジニアの人たちも話下手だったり、木訥な人がいるので、そういう人たちがミニマムな *survival skill* として、取りにきているんです。ですから、英文学とか、経済学専門の人とかは、べつに *Speech* をやらなくてもよいという発想なんです。

7. NEW CROWN のスピーチ教育

森住 どんな人もミニマムなスピーチスキルが必要ですね。そのためには、対話技術も必要ですが、その前に、自分なりの意見を、叙述文できちんと書ける、あるいは叙述文で言える能力が必要です。スピーチの基本は叙述文だからです。実は、*NC* は、これまで叙述文主導だったのです。1978 (昭和53) 年度版やその直後の版の *NC* を見ると、叙述文の多さは一目瞭然です。これがしっかりしてさえいれば、あいさつや日常会話は、適宜、その場で補える。今は、学習指導要領などの影響もあり、*NC* も多少は変わってきてはいるのですが、それでも、中学校の教科書としては、叙述文が多い方です。これは、30年前から変わらぬ姿勢です。確かに、会話の妙味もありますが、会話で突発的に戦争の話や、自分の夢の話などはできないですよ。話題も日常生活のことに終始しがちになります。叙述文の場合は、イントロがあればすぐ本題に、それも、深い内容に入れます。中学の早い段階でも、スピーチの基本として、まず、3行でも5行でも叙述できちんと言え、書けることを目標としておけば、かなり力がつきます。アメリカ合衆国で、初期段階で行う *Show & Tell* やその後の *Public Speaking* も、叙述ですよ。それが、高度になるにつれ、

Discussion や Debate などになっていくわけですね。

もう1つ、NC がスピーチを取り上げる理由として、自己表現の観点があります。すなわち、自己の発露です。叙述文を、自分の立場で書けば、そのまま自己表現になります。これは、「聞いたり、読んだり」することから、「話したり、書いたり」することへの移行にも関係しています。つまり、受信から発信です。このように、自己表現という発信型コミュニケーションとして、スピーチを重要視してきたのです。

なぜこの立場をとってきたか、つまり、この理念の前提にあるのは、思い起こしますと、1980年代から1990年代にかけて深刻になってきた「ムカツキ・キレル子どもたち」という現象でした。ことばで表せば「発散」できるのに、つまり、自己表現できるのに、暴力をふるってしまうわけです。この問題を英語教育の立場からも考えたかったのです。ところが、この問題は当時だけの問題ではないですね。今でも続いているとも言えるし、最近の大人の問題でもあるとも言えます。つまり、自己表現と発信はいつの時代でも必要というわけです。

8. おわりに

鈴木 昔、アメリカで演説というと、Public Address でよかったというのは、低い立場の人や、一般の人が演説などをしなくてもよかったんでしょうね。任せておけばよかったのが、だんだん中産階級のような方が広がって、平等になっていっていったん、いろいろな人がいろいろな価値観を持って、いろいろなことを言うようになり、American Rhetorical History という学問が成立するようになっていったんです。日本も70年代くらいまでは右肩上がりだったんで、お偉いさんだとか、長老だとかに任せておけばよかったんです。しかし、だんだんシステムがうまくいかなくなって、教育レベルも上がってきたときに、それぞれが自分のことを主張して、それらをうまい形でまとめていかないと、まとまりがつかないようになったのではないのでしょうか。日本もアメリカも同じで、一言で言うと、community が喪失したんです。アメリカも

community が崩壊してから、少年犯罪とか、社会的な犯罪率も高まったし、日本もそういう時期になりかけているんだと思うんです。だから、コミュニケーション教育の必要性が今ほど日本で高まっていることはなくて、森住先生のお話を聞いて、まさに今こそ自己発信することで、自分の意見をわかってもらう必要があると思いました。

森住 公民権運動の話のところで、鈴木先生が言われたように、人には時代のめぐりあわせがありますね。また、それぞれの人生に、よい時と悪い時があるように、国、社会にも同じようなことがあるような気がします。そういう点で、現在の日本の子どもたちもいろいろな問題を抱えています。消費社会のまっただ中にあり、モラルも壊れてきています。これは、大人の責任とも言えます。学校教育の教科の1つとして英語科があり、検定教科書が使われているわけですが、このような社会状況にあるだけに、教科書の内容とこれを支える形式をますます大切にしなければいけません。

今日は、「I Have a Dream」をきっかけとして、「題材」と「スピーチ」のことについてお話を伺いましたが、これをできるだけ活かすような形で、また教科書を考えていきたいと思います。今日は、貴重なお話をありがとうございました。

鈴木 楽しく話させていただきました。ありがとうございました。(2009年6月)

森住 衛

桜美林大学大学院教授・大阪大学名誉教授。専門は英語教育学・言語文化教育。共編著や監修などに『英語教育と日本語』（中教出版）、『英語要覧』（大修館書店）、『言語文化教育学の可能性を求めて』（三省堂）、『単語の文化的意味』（三省堂）、中・高の検定教科書 *New Crown 1, 2, 3・Exceed I, II, Reading, Writing*（共に三省堂）などがある。

鈴木 健

明治大学准教授。専門はレトリック批評・スピーチ・コミュニケーション論。特に、政治演説とポップ・カルチャーの研究に力を入れている。フルブライト研究員として、南カリフォルニア大学コミュニケーション学部客員教授を歴任。共著書に、『英語ディベート理論と実践』（玉川大学出版部）、『説得コミュニケーション論を学ぶ人のために』（世界思想社）などがある。